

宗教生活から信仰生活へ

芝田 米蔵



芝田米蔵さん(中央)と、お孫さんの菜南(ななみ)さん(右)、俊介さん(左)

私が、高校卒業間際の十八歳の二月頃だったでしょう。当時、町役場の二階で行われていた、ある宗派のキリスト教会の伝道講演会に、五日間出席しました。そこで初めて聖書に接し、イエス・キリスト様のことを知り、またその時にイエス様の御再臨(ごさいりん)の話(ことば)を耳にしました。幻燈(げんとう)に写し出された時計の針が十二時五分前を指し示す絵が、御再臨の近いことを語ったその内容と共に、いつまでも私の記憶に残っておりました。その後、教会の案内に沿って、毎週日曜日の夜の集會と、水曜日の夜の祈り会に、約半年間通いました。そしてその間、牧師様に「もう私には、集會の案内の手紙をくださなくてもいいです。私は必ず出席しますから」と言いました。その集會には五、六名、多くて十名ほどの人が集っていました。

そして、たしか八月だったと思いますが、浜松市内で行なわれた教会主催のバイブルキャンプに参加しました。そこには十四、五名の青年達が集っていたと記

憶しています。

私はその時、初めて会った方々が何人もおりました。その時、その方々が私よりも讃美歌をずっと上手に歌い、お祈りも上手に捧げるのを聞き、いったいこの人達は何者かと思議に思いました。その時、その教会は、週の第七日目の土曜日が礼拝日であり、これは絶対守らなければならない日だと知らされました。また、毎週日曜日の夜と水曜日の夜に集いがありました。五、六名の人、多くて十名の人が集われていました。次の土曜

日、私は朝から教会に出席しました。そして教会堂に入ってビックリし目を見張りました。何故なら、教会堂では約三十名以上の人たちが、真夏であるのに、男性は白いワイシャツにネクタイ、女性髪をきれいに整え、身だしなみの良い姿で座っておられました。

後で分かったことですが、実は、この方々が教会員(信者)であり、私はまだ求道者として扱われていたのです。それまでは、自分はこの教会の信者であると

思っていました。次の年の春、藤枝(とうぎ)の栃山川(とちやまがわ)でバプテ

スマを受けました。そのようなことがあって以来、私は五十四才になるまでの三十六年間、病気で身動き出来ない時を除き、毎週土曜日の安息日は、一日たりとも教会出席を、礼拝を休んだ記憶はありません。

その頃の私の教会生活は、まさに宗教生活であり、信仰生活ではありませんでした。救われるために教会に行き、救われるために聖書を読み、救われるためにあれもし、これもし、救われるために、あれも食べない、これも飲まないといった生活でした。

私は二十七歳で結婚しました。もちろん妻も同じ教会に出席しておりました。この間に四人の子供が与えられました。子供達は四人とも土曜日は、小学校を休ませて、教会の礼拝に参加させました。中学校・高校は、それぞれ遠く茨城県、広島県にありましたが、教会が運営する、土曜日が休日の学校で学ばせました。

そうした三十六年間を振り返る時、そこには自分で

頑張り、自分で努力して救いを得ようと必死な自分の姿がありました。

そんなある日、妻が日曜日に一人で東京に行つて来ると朝から出かけました。そして、それが二週、三週と続きましたので、ある日、夕方帰つて来た妻に「いったいお前はどこに行つて来たのだ」と怒り気味に尋ねると、「東京の吉祥寺キリスト集会の礼拝に行つて来た」とのことでした。もちろん、私は面白くなく、文句を言いたい気持ちでしたが、信仰は個人の自由でもあり黙つておりました。そのようにして日曜日に、勝手に吉祥寺の礼拝に行く妻に「礼拝日は週の第七日目であると聖書にはつきりと書いてあるのに、なぜ週の第一日目の日曜日なのか？ 指導者のベックさんに聞いてこい」と強く言いました。ある日帰つて来た妻に「ベックさんは、礼拝のことを何と言つていたか」と聞くと、妻は「ベックさんは笑いながら、ご主人もそのうちに分かるよ」と答えられただけのようでした。

その後、私はかなり真剣になり、新約聖書を隅々までくり返し読みましたが、礼拝日が第七日目から第一日目に変更されたという聖句はありませんでした。でも、しばらく経ったある時、次の聖句を示され、何故かホツとしたというより、エツと思わされたことがありました。

こういうわけですから、食べ物と飲み物について、あるいは、祭りや新月や安息日のことについて、だれにもあなたがたを批評させてはなりません。これらは、次に来るものの影であつて、本体はキリストにあるのです。

(コロサイ 2:16-17)

そのうちに誰彼となく、日曜日に私の家に人々が集まり始め、日曜日に家で集会が始まるようになりました。数週間でしたが、私は土曜日には今までどおり教会に出席し、日曜日には家で行なわれる集会にも参加

しました。一方、仕事の忙しい時には、私は日曜日は事務所へ仕事に出ていました。そんなことをしているうちに、ベックさんが藤枝の私の家まで来てくださり、集会がもたれるようになりました。

気が小さく、いい加減な性格の私は、いつの間にか日曜日にもたれるキリスト集会のほうに身を置くようになり、御代田で行なわれ全国から集まる集いにも参加するようになりました。しかしそのような集いで、集われた方々の口から出る奇妙な言葉を耳にして、大変気分を悪くした思い出があります。その言葉とは、「あの方は救われた」というものでした。そしてその言葉を口にしながら大変喜んでいる様子を見た時でした。しかも、こうした集会に数回しか出席したことのない方を指しての言葉でした。いったいここに集う方々はどうなつてしまったんだろう、と思いました。そしてそんな中でも、特にビックリしたのは、その日初めて集会の集いに参加し、ベックさんや集会の皆さんと会

話した方のことを「あの方は救われた」と平気で話しており、そして、その方が今晩バプテスマ(洗礼)を受けると聞いた時でした。

かつての私の三十六年間の教会生活では、救われるために教会に出席し、救われるために何をおいても礼拝にあずかり、救われるために聖書を読み、救われるために祈り、救われるために伝道の働きに参加していたのに。

そして一般的に、罪と言われることから身を遠ざけ、食べるにも、飲むにも旧約聖書の中で悪いと言われるものは口にしないようにと頑張りました。

でも、私は、「救われた」などと一度も思ったこともないし、人からそのように言われたこともありませんでした。それなのに、この集会の方々は、今日初めて集會に来られたばかりのあの方が「救われた」などと、なんていいかげんな、おこがましいことを言う人達だと内心あきれた思いでおりました。ところが聖書には

このように書かれてあります。

そこで、彼のことばを受け入れた者は、バプテスマを受けた。その日、三千人ほどが弟子に加えられた。

(使徒 2・41)

このみことばから明らかなのは、バプテスマを受けるために特別な学びは必要なく、また資格も必要ないということなのです。

その後数年経って、実は私の方が大きな勘違いをし、間違っていたことに気づかされました。それは、私がイエス様の十字架の犠牲を価値なきものとしていたことでした。

すなわち、私の信仰の土台が、聖書のみことば、主イエス様の約束の上に立っていなかったことでした。私は、いわゆる「旧約聖書」の時代に、生きているのに等しかったのです。

神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。

(ヨハネ 3・16)

ここに書かれてありますみことばから分かりますことは、すでに約二千年前、主イエス様が、十字架上で血を流され、ご自分のいのちと引き換えに、全ての人の罪を背負ってくださったということです。ですから罪を悔い改め、イエス様の十字架の贖い^{あがな}を信じ感謝する者は救われるのです。すなわち「信じた」は「救われた」を意味します。

ですから、この集會に集う皆さんの信仰が、あきれた信仰なのではなく、むしろ私の方に、イエス様なしてくださったことに対する信仰がなかったのです。すなわち、私がしていたことは、「イエス様がなしてくださったことを信じる」のではなく、救いを「自分の努

力で獲得しよう」とする宗教生活であったのです。これは、「信仰生活」からまったくかけ離れた「宗教生活」でありました。

ですから、今ふり返ってみると、それまでの三十六年間の私の宗教生活には、本当の平安、喜び、希望はなく、心の中にはいつも「私は、もしかしたら天国に行けないかもしれない」と揺れ動く思いがあつて、不安で喜びのない生活を過ごしておりました。具体的なことを言いますと、実は、私は、イエス様の御再臨^{まへ}が怖かったのです。待ち遠しいなんて心底思えなかったのです。イエス様のおいでになるのが、私の霊的状态の良い時、思いにおいても行ないにおいても最も良い状態の時に来てくださればよいのにと、まるで綱を渡るような日々でした。

しかし、今はまったく違います。相変わらず醜^{みにく}い心と世的なことに翻弄^{はんろう}されていますが、イエス様はこんな私をも死ぬほど愛してくださったのだ、そして今も

愛してくださっているのだと、みことばを通して約束してくださっておりますから、平安と喜びでいっぱいです。ですから、今は「主よ。早くおいでください」と心から叫びたくなります。

全国の信仰を同じくする集會の皆さんと共に、みことばだけに目を注ぎ、イエス様のみを見上げつつ、信仰の道を歩み続けたいと思います。

芝田 米蔵 (しばた よねぞう)

昭和十三年二月生まれ 静岡県立藤枝農業高等学校卒 (昭和三十一年)、卒業後農業に従事、土地家屋調査士、行政書士 開業 (昭和四十五年から現在に至る)

目に見えるもの、耳に聞えるもの

村上正剛



一番右が正剛さん、妻の恵子さん、ベックさんと

まさしく、聖書に書いてあるとおりです。「目が見たことのないもの、耳が聞いたことのないもの、そして、人の心に思い浮かんだことのないもの。神を愛する者のために、神の備えてくださったものは、みなそうである。」

(1コリント 2:9)

私たちは、見えるものではなく、見えないものにこそ目を留めます。見えるものは一時的であり、見えないものはいつまでも続くからです。(2コリント 4:18)

これらのみことばは、目にするたびに気になる聖句でした。長い間、私は「神の存在は肯定も否定もできない」と考える不可知論者だったからです。救われてからも受洗した後も、ある時期まではこのみことばに確信がもてませんでした。それは、これからお話しするような、生い立ちと成人後の社会生活の故だったと思います。

私は一九三九年(昭和十四年)八月に旧満州の満鉄官舎で生まれました。終戦までの六年間は平和で平凡な家庭で育ちましたが、終戦して翌年(小学一年次)に熊本県の天草島に急遽引き揚げることになりました。何が何だかわからず、ただ親や姉姉の後について行き、はぐれないようにするのが精一杯でした。

無事に帰国できましたが、当時ほどの家庭もそうであつたようにいつも空腹で、田や畑のない所へ七人家族、今考えても思い出たくない日々の生活でした。帰国後の父は定職に就けず、現金収入がなく、私は新学期ごとに教科書を買うために親戚に借金しに行かされることは大変辛いことでした。

そんな状況ですから、高校卒業後は働いて家に仕送りするのが当たり前だと思っていました。旧国鉄の熊本鉄道管理局(その頃は全国に二十七の管理局有り)を受験し、三次試験まで受けて合格しホッとしたのも束の間、当初の三年間は非正規職員として、「日雇労働者

保健手帳」を貰って一か月に二十三日間、日給で働かされ、恥ずかしい思いでした。その頃は高度経済成長期に入る前の不景気で、「寄らば大樹の陰」と期待して就職したにもかかわらず、引き揚げ後の生活と不遇な日々を振り返ると「神も仏もないのか」とやり場のない思いで過ごしておりました。

こうして鬱々とした青春を過ごしましたが、その後日本は徐々に高度経済成長期が訪れ、私も遂に本訓練を受けて蒸気機関車(通称SL)の「缶焚き」となり、給料も上がってホッとなりました。けれども、暫くすると、このまま熊本局にいても今後の人生が拓けるとは思えず、部内の試験を受けて東京に転勤を決意しました。

東京では赤羽駅や品川駅で勤務を経て、その頃時流になりつつあった大型コンピュータ処理業務に携わるようになりました。そこでは人の助けを受けずにすべてを自力でやるんだと力む一方で、人の目を意識し他

7人の証し

Unser Herr lebt

人からの評価を気にするようにもなりました。

新しい仕事、結婚と重なりやつと恵まれた生活が始まったかに見えましたが、スタートしてみるとなかなか大変でした。文系志向であった者にとり、情報処理関係の業務として外国製のコンピュータでプログラマーやシステムエンジニアの役をこなすのはとてもハードルの高いことでした。しかし、一旦乗った社内での業務ルートはなかなか変えられず、四苦八苦しつつなんとか結局定年まで続けることができました。こうしたサラリーマン生活では、他人に迷惑はかけたくない、自分だけが頼りと頑張るしかありませんでした。そしてやつと大過なく定年を迎えようとしていた時期に、業務上でかなり深刻なトラブルが起きました。いま思うと、このことがキリスト集会に導かれるきっかけとなったのですが、その時は何故この時期になつてこんなことが起きるのかと人を憎み、神を恨みました。トラブルの収束のために社内関係各所や外注の会

社とも掛け合い、どうにか調整しようと手を尽くして動けば動くほど解決は遠のきます。これが年貢の納め時かと、家内が勧める集会に行ってみることにしました。どんな所かと疑心暗鬼でしたが、そこではよく言われることですが言葉では表現できない柔らかな雰囲気を感じました。この温かく柔らかな感じこそが集会の原点だと思います。

この雰囲気はどこからくるのか、最近でも感じていることは「目に見えるものを根拠にした自信と、目に見えないものを根拠にした自信と、どちらがより確かなものなのか。それは目に見えないものを根拠にした自信ではないか」と思わされています。目に見えるものを根拠にする自信は、根拠となる事実がなくなれば消えてしまう。何かが達成できなかったり、失敗したり、事態が変われば消えてしまう自信です。

一方、目に見えるものに根拠をおかない自信は、目に見えない何かがあつて、理由はないけれど、うまく

いくような気がする、いいことがあるような気がする。いろいろな困難を抱えていて、ちよつと大変そうだなあと思う状況にあつても、空元気というわけではなく、どこかのん気で、幸せそうで、他人にも親切で、やさしくできる。生まれ持った性質も勿論あるとしても、それでもほとんどの子供が持つような素直な楽天的な態度でいられる余裕：初めて集会に参加してみてこのような印象の人が多いように思ったことが、継続して集うことになった理由でした。これが神を愛する人々が持つ賜物なのだろうかと思ひ、自分がいかに「目に見える根拠」にばかり頼ろうとしていたか、ということに気がつきました。

世に勝つ者とはだれでしょう。イエスを神の御子と信じる者ではありませんか。
(1ヨハネ 5:5)

話を戻します。その後トラブルの件は後味が悪いな

がらもなんとか決着がつき、定年退職しました。その前に、自分の力量にも見切りをつけて、主に従う者になりたいとの願いから、御代田の国際福音センターでベックさんから洗礼を授けていただきました。退職後、関連会社から誘いも受けましたが、今後の人生は何とか主に預かつてもらひ、今までの宮仕えの生活に終止符を打ち、それまで心の中で温めていた外国で日本語を教える道を選びました。教職免許はありませんでしたので、夜間の日本語教師養成講座で資格を取り、中国で八年とベトナムで約四年間、若者相手に充実した日本語教育の時間を十二年間持つことができました。それと同時に、この十二年間は、私にとり本当に主を見上げ信仰を深める豊かな恵みの時となりました。

あなたがたをキリストにあつてその永遠の栄光の中に招き入れてくださった神ご自身が、あなたがたをしばらくの苦しみのあとで完全にし、堅く立たせ、強くし、

不動の者としてくださいます。

(1ペテロ 5・10)

中国での恵み

中国では最初に、上海からバスで六時間余かかる揚子江沿岸の田舎町へ行って教えました。中国米の産地で田圃には水牛がいるようなのかな所で、生徒も純朴で楽しい一年でした。

その後、上海でも三番手位の大規模な学校に移りました。この学校の経営者は日本留学帰りの中年の遣り手で、宣伝費を惜しまずに生徒を集め、非常勤講師は七十人位と大勢おりました。その経営者からは、集めた生徒は一人も辞めさせないように教育してくれ、と常々言われました。ところが受け持ったクラスは、半分は真面目、半分位は教室にゲームをこっそり持ち込むような生徒たちでした。子供を田舎の親に預け、真剣に日本語を学んで、日系の少しでも良い会社に就職したいという生徒もいれば、不真面目な生徒も多くな

りました。彼の親は金持ち、大学に行く知力も気力もなく、3K(きつい、汚い、危険)もイヤ、日本語でも勉強して留学でもしようかという生徒たちでした。

このようにクラスの中が二分化している状況で、真面目な生徒たちの班は普通の日本語会話はほぼ理解できるようになりました。もう一方の班は私がゆっくり話す日本語でさえも理解できず、やる気もなく、欠席が多く授業にもついてこれませんでした。どう授業を進めるか戸惑っていたら、真面目な女生徒たちが「私たち中心に授業をしてください。お金を払って勉強しているのだから、不真面目な班に足を引っ張られるのはイヤです」と強く訴えてきました。それまで指導方針で迷っていましたが、このことで私も決心がつき、形だけ学校に来て卒業して就職してもかえって日中交流・親善の役には立たず本人の為にもならない、義務教育ではないのだからやる気のある子を伸ばす授業を、と心がけました。

ところが、この学校は無試験で生徒を集めておきながら、「教師の評価調査」をこっそり生徒側にさせていたようで、ある日経営者から「あなたの授業は生徒に合っていない。もっと生徒を引き込む授業をしてほしい」と注意されました。私はクラスの実情をあまりよく知らない経営者に説明し弁明しましたが、後日、青海(日本海沿いの都市)に学校を新設するから転勤してくれと言われました。家内も上海に来てやつと慣れた時で、私も集会のない場所には行きたくなかったのです。それを断り学校を辞めました。

でもこのまま日本へすぐと帰りたくもありません。二、三日寝込んで考えていると思いがけず主が恵みの手を差し伸べてくださいました。当時中国に駐在していた集会の方と仕事の関係があった中国人女性の経営者が私の事情を聞き、その会社の外人枠を使って雇う形を取ってくれた結果、中国滞在ビザも発給されたのです。日本の大学卒のその経営者は近い将来自分

も日本語学校をつくりたいので、その時までは個人的に日本語を教えるアルバイトとして勤務してくださいという好条件でした。このことで、主により頼み、前提条件は付けなくても祈ることの大切さを体験しました。上海での生活にも慣れてきて、自分で見つけた小さい教室の少人数クラスを教えたり、中国人夫婦に家庭教師をしたりと、自分のペースで生徒との絆も深めながら日々を送りました。その後設立された待望の日本語学校では、専任講師として二〇〇八年に帰国するまで勤めることができました。大手の学校を辞めた直後は何のあてもなく途方に暮れましたが、主のご計画は計り知れません。

主を恐れよ。その聖徒たちよ。彼を恐れる者には乏しいことはないからだ。
(詩篇 34・9)

人知をはるかに越えたキリストの愛を知ることがで

7人の証し

Unser Herr lebt

きますように。こうして、神ご自身の満ち満ちたさまにまで、あなたがたが満たされますように。

(エペソ 3:19)

その頃、上海近郊には数組の集会のご夫婦が住んでいましたので、そこに私が加わり、家内の恵子も少し遅れて参加して「上海集会」が始まりました。慣れない土地での不安、学校での授業の不全感もある中での毎週の礼拝はまことのオアシスでした。日曜日が待ち遠しくてたまりませんでした。

暫くして奥様が日本人、ご主人が中国人の御夫婦も集会に加わりました。そして二〇〇二年八月にはベック夫妻と日本で集会の皆さんを迎えて、初めての上海でのバイブルキャンプ(喜びの集い)が開催されました。この時にその中国人のご主人が洗礼を受けました。さらに、このキャンプに参加した私の長男の正樹と秦野美由紀さんが、その後結婚へと導かれたことも主の大

きなご計画と恵みでした。中国には足掛け八年過ごし、その間には上海集会のメンバーに入れ替わりもありましたが、何度か上海にてミニキャンプも開かれました。

見よ。兄弟たちが一つになって共に住むことは、なんといいしあわせ、なんという楽しさであろう。

主がそこにとこしえのいのちの祝福を命じられたからである。

(詩篇 133:1、3)

ベトナムでの恵み

次は、ベトナムに渡ってから主の恵みです。

あなたがたがキリストの弟子だからというので、あなたがたに水一杯でも飲ませてくれる人は、決して報いを失うことはありません。これは確かなことです。

(マルコ 9:41)

主は天から目を注ぎ、人の子らを残らずご覧になる。御住まいの所から地に住むすべての者に目を注がれる。

(詩篇 33:13、14)

中国へは夫婦で行きましたが、ベトナムへは単身赴任で行きました。ホーチミンに行って三週間くらいしてアムバー性の赤痢に罹りました。週末の夜の授業が終わって屋台でベトナムラーメンのフォーを食べたのがよくなかったようです。体がフワフワするような感じで熱が出てきました。ホテルでボタンと寝込んで、そのまま二十時間くらい寝続けたように思います。熱にうなされて夢をみました。臨死体験みたいですが、あたかも自分の体が浮き上がり宙を飛んで丸い井戸の中に吸い込まれ、どんどん落ちていきます。井戸の入りが小さくなる中で、その部分が金色で明るく、髭をはやした人が見下ろしています。これはイエス様に違いないと思いました。はつきり顔は見えないのです

が、微笑んでいるようです。イエス様に見守られている、と思つたら、急にこの病気で死んだり再起不能になることはない、大丈夫だと思えて、そのまま眠りに落ちました。イエス様を信じていなければこんな夢は見なかったと思います。

月曜日になり、日本人医師のいる病院で診断を受け、日本に帰ろうかと思うと話したところ、「このまま薬を飲んで治療しなさい。今、日本へ戻ると必ず関西空港で隔離されて大変だよ」ということでした。その後、現地(ホーチミン)では、赤痢を怖がる人は希で、あたかも軽い風邪引きのように薬を飲んで治療しながらも普通どおりに日常生活を続けました。その学校の教頭はベトナム人で体の大きな男性でしたが、私の飲んでる薬をみて言いました。「この薬は自分もベトナム戦争時にジャングルの中で飲んで良くなった物と同じだから治るよ」と気づかってくれました。日常の生活でも、ベトナムの人はとても親日的で親切でした。現在

7人の証し

Unser Herr lebt

でも当時の人々とメールや電話で連絡を取り合っています。ホーチミンには大きな教会がいくつもありましたが、どこもカトリックでマリア像が飾られているところが多く、また讃美歌もギター伴奏つきでなんとも南国風の礼拝でした。商業都市のホーチミンでは、集会の方はいなくて淋しく、インターネットで礼拝や火曜の学びに参加していました。日本との二時間の時差を計算してパソコンの前に座り、五千キロ離れた埼玉に住む妻とで同時に聖書の学びが出来、いつでも共に祈れたことは本当に主からの恵みでした。ベトナムには三年いましたが、二〇一一年三月の地震と大災害を機に帰国しました。

以上、約十二年の外国生活をどうにか無事に過ごせたのも、ただただ主の守りがあったからでそれ以外は考えられません。主に信頼していれば、いろいろな問題が起こっても夫婦でともに祈って乗り越え、解決へと導かれたことは本当に貴重な体験でした。

その後、中国やベトナムの生徒たちの中には日系企業や日系関連会社に就職し、仕事や研修旅行で日本に来る子もいます。その時には必ず上尾の我が家に立ち寄ってくれ、日本の家庭料理を食べながら近況を話してくれています。また私と恵子が中国、ベトナムに行った時は生徒たちの家庭を訪れ、彼らの父母たちとも家族ぐるみで国際親善交流ができることも主にある恵みだと感謝しています。

村上正剛（むらかみせいこう）

一九三九年八月 中国（旧満州）生まれ 戦後熊本県
天草島に引き揚げ、一九六三年から東京、一九八四年
から埼玉県上尾市在住

妻 恵子

長男一家（同居） 二男一家（さいたま市在住）

祈りつつ歩む日々

村上恵子



左が恵子さん、右が正剛さん

汝ら翻へりて幼児の如くならずば、天国に入るを得じ。
（マタイ 18:3 文語訳）

このみことばは、敗戦のつめ跡がまだ少し残る東京品川の自宅近くにあったベテル教会で、初めて神さまから与えられたみことばです。私は当時十歳くらいで、近所の友だちに誘われるままに行った教会の日曜学校でのことでした。そこで意味もよくわからぬまま暗唱したこのみことばは、なぜか私の心でその後も繰り返し思い出され、後年、吉祥寺キリスト集会に導かれて、このみことばに再び出会ったときには、まるで私の心にサーと光が差したように感じました。

あなたがたも悔い改めて子どもたちのようにならない限り、決して天の御国には、はいれません。

（マタイ 18:3）

私は、一九四三年一月一六日、東京の深川で生まれ、両親と妹と弟の五人家族の平和な家庭で育ちました。家には仏壇と神棚があり日本古来の慣習に従っているごく普通の家庭でした。父は造船会社に勤務。母は専業主婦で晩年救われ、九十二歳で天に呼ばれるその日まで、しっかりと母でした(母が召される前夜、母と妹と三人でたくさん賛美し祈ったことを今でも忘れません)。

私は、幼い頃から宇宙や月星太陽などこの世の森羅万象が不思議でたまりませんでした。また、死んだらどこへ行くのだろう、愛する家族と必ず永遠の別れがある、と思うと恐怖でしたが、聞いても誰も教えてくれませんでした。そして聞くたびに嫌な顔をされたので、それ以上聞くのをやめました。

二十五歳の時に、四つ年上の主人と結婚し、二人の

息子も与えられました。主人は優しい人で(少々頑固ですが)、子育てはとても幸せな楽しい時だったように思います。

そんな中でも時折「私は何でここにいるのだろうか」「私はどこから来て、どこへ行くのだろうか」というような思いがふつふつと湧いては消えていきました。

私がこのキリスト集會に導かれたのは一九八〇年の春、吉祥寺集會から徒歩約十分の社宅に家族四人で住んでいた時でした。当時小学二年生だった次男のクラスのお母さまに誘われて集い始めたのです。

その十年前の一九七〇年冬に、私の父が五十六歳の若さで突然亡くなりました。急性白血病でした。健康が自慢で病氣一つしなかった父が、発病から三か月であつという間に逝ってしまったことは私にとって大きなショックでした。それまでも、死に対する恐れはありましたが、現実に元氣だった父がアツという間に目

の前からいなくなってしまう…父は何処へ行ってしまったのだろうか…と思うと氣が狂いそうでした。それは、死に対する恐れというより「言い知れぬ不安と恐怖」でした。

長男が生まれた直後であり「あんなに大きくて頑丈な父があつという間に逝ってしまうのだから、こんな幼子なんかひとまりもない」と思い、死の恐怖は増すばかりでした。子どもが熱を出しても、どこかが痛いと言っても、死ぬのではないかと恐れ、おろおろする愚かな母でした。

平安がいただきたくて求め続けていました。永遠に朽ちないものは何なのか? 有るのか、無いのか? 私は真理を求め続けていたのです。でも求めているものがわからず、いろいろな趣味に没頭して氣を紛らわしていました。

そんな時、主なる神さまは私をあわれんでくださり、このキリスト集會に導いてくださったのです。

7人の証し

Unser Herr lebt

だから、わたしはあなたがたに言います。自分のいのちのことで、何を食べようか、何を飲もうかと心配したり、また、からだのことで、何を着ようかと心配したりしてはいけません。:

あなたがたのうちだが、心配したからといって、自分のいのちを少しでも延ばすことができませんか。なぜ着物のことで心配するのですか。野のゆりがどうして育つのか、よくわきまえなさい。働きもせず、紡ぎもしません。:

きょうあつても、あすは炉に投げ込まれる野の草さえ、神はこれほどに装ってくださるのだから、ましてあなたに、よくしてくださいださらないわけがありません。か。信仰の薄い人たち。

そういうわけだから、何を食べるか、何を飲むか、何を着るか、などと言って心配するのはやめなさい。:

だから、あすのための心配は無用です。あすのことはあすが心配します。労苦はその日その日に、十分あり

ます。

(マタイ 6:25、27、28、30、31、34)

私は聖書を開いて初めてこのみことばに出会った時に、体中が熱くなるのを覚えました。

そして集会の皆さんにお祈り頂く中で救いに導かれ、翌年一九八一年十一月二十一日に洗礼の恵みにあずかりました。私が三十八歳のときでした。

さらにその半年後には、実妹深澤せつ子も受洗し、感謝でいっぱいでした。

集会に来てベックさんと初めてお会いした日の日記を改めて読みかえしてみました。

「一九八〇年(昭和五十五年)三月五日 水曜日 くもり

主よ感謝します。ベック兄との交わりを持ち私はハッと目が覚めるようにわかりました。

大いなる神・御子なる神・聖霊の神・神様の偉大さが

わかりました。

そして悔い改め、感謝する事も覚えました。私がこのにいるのも神の御計画のうちにあるのですね。

神に近づこうとしなかった私、私たちの罪のため十字架にかかり血を流してくださいとイエスさまに感謝いたします。アーメン」(原文のまま)

読み返してみてもびっくりしました。初めてのお話でこんなにも聖霊さまがわからせてくださったっていうことへの驚きです。

また、ベックさんのお話の中でベックさんが言われること、つまり聖書が言っていることは確かなことだ、これが知れたかったことだと、体中が熱くなるのを覚えました。ベックさんは再臨の話もされましたが「それは必ず起こることだろう」と素直に信じられたのが不思議なくらい、神様はちっぽけな私に近づいてくださいました。

主のあわれみによって主の御手の中に入れていただいた私は、万物の造り主である主なる神がおられることを聖書の冒頭で知り、そのとき幼い頃からの「疑問」に対して霧が晴れた思いでした。

した。

最初の、神が天と地を創造した。(創世記 1:1)

その四年後、正樹は上海でのバイブルキャンプ(喜びの集い)で出会った秦野美由紀さんと主にある結婚に導かれました。

また、死は終わりではなく天の御国で主イエスさまとともに永遠に時を過ごせること、また先に逝った愛する人たちとも天国で再会できることを知り、死の恐怖からも解放されました。

中国上海に導かれた経緯を少しお話します。

そしてそれ以来「家族の救い」、特に主人の救いを熱心に祈りはじめました。

主人は一九九九年に六十歳でJRを定年退職。その一か月後、若いころからの夢だったという日本語教師となり、上海に八年、ベトナムにも四年赴任しました。私にとって中国は未知の国でしたし、六十歳近くなつての外国暮らしに「イエス様、行きたくないです」とつぶやく者でした。でも主は「行きなさい」と言っておられることを一つ一つの出来事や、みことばを通して示され、「従います」と悔い改めて、二〇〇一年暮れに夫の待つ上海へ一人で向かいました。

祈りは聞かれ、私が救いにあずかってから十八年後の一九九八年一月二日、主人は御代田の国際福音センターで洗礼の恵みにあずかりました。そのとき長男の正樹も共に受洗し、私の心は喜びと感謝でいっぱいでした。

あなたの道を主にゆだねよ。主に信頼せよ。主が成

し遂げてくださる。

(詩篇 37:5)

上海では日本でキリスト集會に集つておられた方のお宅で毎週日曜礼拝がもたれていました。その当時は四〇五家族が集められ、かわいい幼子たちもいて、礼拝と主イエス様を中心としたお付き合いは祝福そのものでした。その孫のような幼子たちも成長し、三人が大学生、高校生の時に日本で洗礼を受けたことは感謝でした。

見よ。兄弟たちが一つになって共に住むことは、なんと
いふしあわせ、なんと楽しいさであらう。

それはまたシオンの山々におけるヘルモンの露にも似
ている。主がそこにとこしえのいのちの祝福を命じられ
たからである。
(詩篇 133:1, 3)

上海でのキャンプ(喜びの集い)は二〇〇二年八月末

いく様子に我々は悩み、祈りました。

不信者と、つり合わぬくびきをいつしよにつけてはいけ
ません。正義と不法とに、どんなつながりがあるでしょ
う。光と暗やみに、どんな交わりがあるでしょう。

(2コリント 6:14)

私たちは二人にみことばを送り続け、祈りました。
ダニエルもジャーニーの悔い改めと救いを真剣に祈つ
た時、ジャーニーは救われ、約一年後の二〇〇六年一〇
月、ドイツキャンプでベックさんから洗礼を受けまし
た。ドイツ語と中国語と日本語での感謝にあふれた洗
礼式は一生忘れられません。受洗の前にジャーニーがイ
エス様をまつすぐ見上げた証しをドイツ語で話し、主
の栄光を見せていただき感動しました！その後二人
は結ばれ、一家は小学生の息子と三人でドイツのミュ
ンヘンで幸せに暮らしています。

7人の証し

Unser Herr Jesu

に行われました。初めての中国での集いであり準備の
時から緊張の連続でした。飛行機の故障で一日遅れの
開催となりましたが、多くの祈りに支えられ受洗者も
備えられて、祝福の中で終えることができました。

その後、数回の上海キャンプも主の守りと祝福の中
で開催され、洗礼に導かれる人も毎回のようになり
て、合わせて八人の方が洗礼の証しをされました。

「行きたくない」とつぶやいていた中国に、悔い改め
て、主に従って行つたとき、主なる神はたくさんの恵
みと祝福を用意してくださることを学んだ上海での
日々でした。

中国人のジャーニーさんのことを書きます。彼女は上
海の日本語学校で主人が教えた生徒のいところで、私ど
も夫婦を通してドイツ集會のダニエルと上海で出会
いました。当時ジャーニーは、信仰をもっておりません
でしたので、イエス様を信じるダニエルと親密になつて

ベックさんが来られた最後の上海キャンプは二〇一〇
年六月でした。

ベックさんが初めて参加された中国の女性とお話し
されていた時に、突然中国の警官がホテルの部屋にど
かどかと入ってくるという出来事がありました。

通訳者を呼び、話し合ひは続きましたが、幸い大事
には至らず、警官は部屋を出ていきました。ベックさ
んは終始平静でにこやかにされていて、警官が出て
行つたあと、「さあ、続きを」と言つて、最後まで福音
を語ってくださいました。ベックさんを通して「真の
伝道者」の姿を見る思いでした。

傍らで一部始終を見ていた私は、体の震えが止まり
ませんでした。これから何が起こるのか？ベックご
夫妻が翌日上海空港を離陸するまで不安な思いでした。
「ベックご夫妻をお守りください。中国の集會の皆さ
んをお守りください」と祈っていました。

上海空港での出国審査を終えてゲートに入ったベッ

クご夫妻は大きく手を振って機上の人となり、無事日本に帰ることができ、また中国の集会の皆さんも守られたことを、イエス様に感謝しました。

この後、ベック兄がひとりごとのように言われたみことばです。

わたしが、あなたがたを遣わすのは、狼の中に羊を送り出すようなものです。ですから、蛇のようにさどく、鳩のようにすなおでありなさい。(マタイ 10・16)

この出来事を通して、世界中に福音を伝えることの困難さを心底覚えしました。今は亡きベックさんが心から願っていた中国での伝道は難しく、ベックさんも心痛めたのではないかと思うと胸がうずきますが、私たちに祈ることができますから祈り続けたいと思います。

全世界に出て行き、すべての造られた者に、福音を

宣べ伝えなさい。

(マルコ 16・15)

あなたがたがわたしを選んだものではありません。わたしがあなた方を選び、あなたがたを任命したのです。

(ヨハネ 15・16)

ドイツ人の宗教改革者マルチン・ルターは「たとえ明日イエスさまが来られても、明日世界が終わりになるうとも、私は今日リンゴの木を植える」と言われました。主のご再臨を待ち望みつつ、ルターのように、この地上での残された生活をも大切にして、主が天の御国に呼んでくださるその日まで、愛する家族や集会の皆さんと共に祈りつつ歩んでいきたいと願っています。

あなたの恵みは大きく、天にまで及び、あなたのまことは雲にまで及ぶからです。神よ。あなたが、天であがめられ、あなたの栄光が、全世界であがめられます

ように。

(詩篇 57・10～11)

アーメン

村上恵子(むらかみけいこ)

一九四三年一月一六日 東京深川で生まれ品川で育つ
一九八四年から埼玉県上尾市在住

夫 正剛(せいこう)

長男一家 村上正樹(まさき)、美由紀、

孫(中2女)

次男一家 村上祐樹(ゆうき)、美雪、

孫(高1女)と(小6男)



すべてを良くしてくださる主

木藤 睦子



一番右が睦子さん、中央がお母様の栄子さん、左はお姉様の裕子さん

主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。
(使徒 16:31)

このみことばの通りに長い年月をかけてイエス様は私の家族に働いてくださり、父、母、姉とひとりひとりに救いをなしてくださいました。

私が初めて神様に叫んだのは、短大二年の夏、母が脳出血で倒れ病院へ運ばれる救急車の中でした。姉が二人目の子の出産で一人目の子連れて実家に戻っており、母は孫の世話、産後の姉の世話、家事などの過労で脳出血を起こしました。次第に意識が遠のいていく母のそばで、私は心の中で突然「神様、母を助けて、助けてください」と叫び、その後、遠のいていた母の意識が戻って来た時に、私は、母は死なないと確信したのでした。あの時なぜ突然に神様助けてと叫んだのか、後になり不思議でした。母の脳出血は軽く、もとの元

気な母になりました。

私は二十八歳の頃、イエス様を信じました。短大を卒業して地元の証券会社に就職して七年ほど経った時、会社の同期であり一番親しかった友人が突然会社を辞めて語学留学で海外へ行きました。その時、友人は自

分の目標を持ちやりたいことを見つけて先に進んでいくのに、私は何もない自分に焦りました。やりたいことを見つけれず、無理にボランティア活動に参加したりしましたが、続くわけもなく、その結果、私がしたことは大きな失恋でした。この時に私は初めて、自分は幸せになりたい、これ以上傷つくことなく一生守られて生きていきたいと思い、苦しい日々を送りました。

一年半後、その友人が語学留学から戻った時に、私は苦しい胸の内を話しました。その時友人から返ってきた言葉は意外なものでした。「私は聖書を信じている。聖書は、大事な本だから貸してあげられないけど、こ

の本を貸してあげるよ」と、集会の出版物である「光よあれ」を手渡されたのでした。友人は海外に行っている間にイエス様を信じる者となっており、その福音が私に伝えられました。その「光よあれ」の中に、たった一つ私に響くみことばがありました。

あなたがたの会った試練はみな人の知らないようなものではありません。神は真実な方ですから、あなたがたを耐えることのできないような試練に会わせるようなことはなさいません。むしろ、耐えることのできるように、試練とともに、脱出の道も備えてくださいます。

(1コリント 10:13)

今、私は苦しいけれど、私にも脱出の道が備えられているんだと、心の中にひとすじの光を見つけたように思いました。私は、ここから少しずつイエス様を信じる者に変えられて行きました。

7人の証し

Unser Herr lebt

冒頭の「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます」(使徒16:31)のみことばは知っていましたが、家族のことを真剣に祈ってはいませんでした。

一九九六年二月、父が末期の肺がんであることがわかり、余命三か月と診断されました。この時、初めて父の救いを真剣に祈り、家族が救われるという体験をしました。また、母との間には信仰の戦いがありました。私の母は十歳の時、母親をなくし、厳しく優しく芯の強い努力の人であり、本当に頑張って生きてきました。ですから、私が信仰を持ったことに對して、自分の努力以外の何かを頼るようになってしまったこと、それが西洋のキリストであることを激しく非難してきました。生けるまことの神様を知らない母は、死にゆく父に最期まで頑張れと言い続けるしか術がなく、頼れるお方を知らない母は、看病が辛かったと思います。ベックさんは二度お見舞いに来てくださいました。

一度目は父の救いのため、二度目は母や姉の救いのためです。父は聖書を見たこともありませんでした。しかし、がんの痛みを通し、また、その後に導かれた終末医療の病院で、痛みから解放されて、イエス様をただ素直に受け入れ、聖書のお約束通り召される二週間ほど前に救っていただきました。救われた後の父は、子どものようにきれいな目をしていました。救われてから召されるまでのわずかな期間、私は病院に泊まり込み、まるで父と二人でどこか別の場所で暮らしているような幸せな時間をいただきました。父の葬儀は、母の反対もあり仏式で行いましたが、その後、ベックさんが「お父さんは、イエス様に救われたのだから記念会をしたらいよ」と言ってくださり、その年の夏の御代田でのバイブルキャンプ(喜びの集い)中に、結婚式のような父だけの記念会を開いていただき、私の家族、姉の嫁ぎ先の家族、会社の親しい友人が出席してくださいました。母は、救われ変わっていった父のこ

とや、また、父の記念会を通して、固かった心が少しずつ開かれてゆき、晩年には共に祈れる信仰の友へと変えられました。

二〇一七年五月、母は末期のすい臓がん、余命三か月と診断されました。

神のなさることは、すべて時にかなって美しい。

(伝道者 3:11)

母の病から召天までを思う時、本当にイエス様は完全であり、足りないことも、また、多すぎることもなく、本当に丁度よく、すべてを良くしてくださったと改めて思います。

二〇一五年頃から、母は心臓病、皮膚がんなどの病を与えられていました。

二〇一六年三月、母は一度召されそうになりました。大動脈弁狭窄症で、母の心臓の弁はいつ閉じてしまっ

てもおかしくないと主治医から言われていましたが、胸を切って心臓を止めて行う手術は、恐いからやりたくない」と拒否し、病状は進行していきました。その後、主は不思議な方法で胸を切らなくてもよいカテーテルによる人工弁置換術へと導いてくださり、手術を受けました。しかし、成功率の高いこの手術で母は急変しました。姉や姪たち家族とみんなで祈って、やつと迎えた手術でした。主治医には、非常に厳しい状態であると言われました。姪は「みんな祈ってやつとここまで来たのに、これでおばあちゃんが死んでしまうのなら、私はイエス様なんて信じない」と言いました。当然だと思いました。私は母の死を受け入れられますが、信仰に導かれつつある家族にとってはつまずきになる：「イエス様、家族の救いのために母の命を残してください」と祈った時、主は聞いてくださり、母の命は残され回復しました。そしてその一年後、母はすい臓がんになりました。私は母の最期を少しでも共にいたい

と思い、迷わず、会社に介護休職を申請して、母が召されるまで会社を休ませて頂けることになりました。

母はイエス様を信じていましたが、私には告知をする勇氣がありませんでした。家族も母に本当のことを言うのはかわいそうだと、告知に反対でした。しかし、集会の皆さんとの話し合いを通して、みこころの時に真実を伝えるべきだと思ふようになりました。その後、主が時を備えてくださり、母に末期がんであることを伝えました。

母は静かに聞いていました。私は母に「がんで命がなくなるのではなく、天国に行く準備ができた時に行くんだよ、天国は近いか。天国は一番いい所で、お父さんや兄弟たち、お母さんのお母さんにも会える、後から私たちも行くから会えるよ」と言いました。母に「イエス様を信じているんだよね？」と聞きましたら、大きく頷きました。私は「一緒にイエス様に感謝のお

祈りをしよう」と話し「お母さんのわがままの罪をこめんなさい。イエス様が十字架で流された血によってすべての罪が赦され、忘れられてゐることをありがとうございます。これからよろしくお願いします」と祈りました。母は大きな声で「アーメン」と言ったかと思うと安心したようにスーッと眠ってしまいました。母の信仰は私が思うよりもずっと揺るがない深いものでした。

ある日、母が何か考え込んでいるようだったので、何か心配事があるのか尋ねました。母は「これから自分の体がどうなっていくのか心配だ。お葬式のことでも心配だ」と言いました。「体のことはこれからいろいろできなくなってくることもあるけど、私がいるから大丈夫」と話し、「お母さんはイエス様を信じているのだから、聖書に基づいた葬儀をすればいいんじゃないの？」と聞いた時、母はキリスト集会で葬儀をすることを決めました。

主治医はクリスチャンドクターで、母も私も信仰を持っていることを伝えていました。また、介護の途中から自宅で看取することを決め、訪問診療、訪問看護を受けていました。先生は母のことを「いい顔していま

書のみことばを聞く母、私とともに祈る母の姿を見て、姉の中にイエス様を信じたい思いが強くなっていき、姉は自分の言葉で祈るようになっていきました。二〇一七年九月一日の真夜中、母は静かに天に召されました。主治医は聖書からみことばを読んでもくさしました。

国ですね」と言われました。病状が進んでいく中でも、母はいつも変わらず笑顔でおだやかでした。親戚、近所の方のお見舞いとキリスト集会の方々のお見舞いには、明らかな違いがありました。本当の生ける神様を知らない方にとって、死に向かう病人にかける言葉は「頑張つて、食べれば元気になるから」というものでした。それに対して、集会の方々の言葉は祈りと賛美です。生ける神様と、イエス様を知らずに生きていくことの空しさを思いました。そして、イエス様と出会われない方々に、本当にイエス様を知って頂きたいと思ひました。姉もなるべく休みを取り、二人で母を看ました。告知されても変わらずおだやかな母、聖

わたしの父の家には、住まいがたくさんあります。もしなかったら、あなたがたに言っておいたでしょう。あなたがたのために、わたしは場所を備えに行くのです。わたしが行って、あなたがたに場所を備えたら、また来て、あなたがたをわたしのもとに迎えます。わたしのいる所に、あなたがたをもおらせるためです。

(ヨハネ 14:2-3)

7人の証し

Unser Herr lebt

そして、先生が行っている教会で召された時に歌う聖歌を歌ってください「お母さんは天国ですから、

万々歳です」とおっしゃって帰っていかれました。母の葬儀は、近くの斎場で御代田キリスト集会の方々にして頂きました。

介護中、母の葬儀について一度だけ祈った事がありました。それは、母の前夜式、葬儀を週末にしてください、ということでした。平日ではみことばを伝えたい友人や会社の親しい方々に来て頂くのは難しいと考えたからです。母の前夜式は金曜日の二十時、葬儀は土曜日の十五時からでした。主はこのような小さなひとつひとつのことにも応えてくださり、年老いた親戚、町内の方々、会社の同僚、友人、多くの方々に福音を伝えることができました。

姉は葬儀で「今、母は十歳の時に亡くなった大好きなふみ母ちゃん、誠父さん、兄弟たちと天国で再会して喜んでいると思います。私たちは母がいない寂しさはありますが、でもいつか母と天国で再会することができますから、それを楽しみに歩んでいきます」と挨拶

しました。イエス様に救われた姉の証しだと思います。

両親が召されてひとりになり、イエス様と向き合う時間が多くなりました。ひとりの寂しさもあります。が、ひとり、イエス様に向き合うことは、とても大切な時間です。毎日のほんの小さな事にも、主は介在してください、いつも最善をなしてください。信仰をもつて二十五年が経ちました。主は弱い私を支えてくださり、ひとつひとつの出来事を乗り越えさせてくださいました。ある集会の方から「睦子さんの家、事が起こされる前より、後の方が全部良くなってるね」と言われたことがあります。思い返すと、本当に主はすべて良くしてくださっているのです。

そこには、イエス様の十字架があります。私のすべてのわがままの罪を一手に引き受け、私の身代わりに死んでくださりお救いくださいました。そして三日目によみがえられ、今、目に見えなくともいつも私の右

の手を引いて、導いてくださっています。どんな小さなことでも祈れること、そして、主は応えてくださること、そのひとつひとつに感謝です。ご再臨まで、信仰を持ち続けて歩めるようにと祈ります。

そのとき私は、御座から出る大きな声がこう言うのを聞いた。「見よ。神の幕屋が人々にもある。神は彼らとともに住み、彼らはその民となる。また、神ご自身が彼らとともにおられて、彼らの目の涙をすっかりぬぐい取ってください。もはや死もなく、悲しみ、叫び、苦しきもない。なぜなら、以前のものが、もはや過ぎ去ったからである。」

わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している。

(イザヤ 43・4)

7人の証し

Unser Herr lebt

木藤 睦子 (きどう むつこ)

一九六五年 長野県須坂市生まれ 日野小学校、墨坂中学校、須坂高校、長野県短期大学卒、野村證券(株)長野支店勤務

姉 木藤 裕子 (きどう ゆうこ)

姪 砥石 早苗 (といし さな)

小林 真里 (こばやし まり) 家族